関西建築の伝統受け継がれる

ＪＩＡ近畿の建築家大賞表彰式　槇氏と畠山氏が対談

ヒューマニズムの観点を評価

畠山氏

槇氏

日本建築家協会（ＪＩＡ）近畿支部（井上久実支部長）は18日、大阪市の綿業会館で関西建築家大賞表彰式を開いた。受賞した畠山文聡氏（ＮＴＴファシリティーズ）には井上支部長から表彰状と記念品が手渡された。その後、審査委員を務めた槇文彦氏と畠山氏による対談も開いた。

槇氏は「審査した作品はどれも個性があり、建築に対する執念を感じた。大阪建築のローカリティーはモノに対するこだわりにある。中でも、畠山さんの作品の揺らめきのある空間をつくり出す手法は村野藤吾にも通ずる部分を感じ、関西建築の伝統が受け継がれているなと思った」と講評した。

また「建築家は、どういう空間をつくれば人間がどう感じるかをよく考えなければならない。畠山さんの作品にはそのヒューマニズムの観点がしっかり入っている」と評価した。

畠山氏は作品解説の後「近畿大の作品では所在地である東大阪が持つものづくりのＤＮＡを取り入れ、ここに必要なものは何か考えてつくった」と述べた。

最後に、司会者の「これからの建築家の役割とは」との問いに対し、槇氏は「どんな仕事でもグローバルな視点を持つこと」、畠山氏は「一つひとつのプロジェクトでささやかな幸せを与えること」とそれぞれ答えた。

審査対象になった畠山氏の作品は、「ＮＴＴ西日本研修センター」（大阪市）と「近畿大学東大阪キャンパス整備計画」（大阪府東大阪市）。

ＮＴＴ西日本研修センター（Ｓ造７階建て延べ１万６６６７平方㍍）は、５―７階の研修フロアに５カ所もの外部吹き抜けを市松模様状に配置。研修室は吹き抜けに挟まれ、室空間が自然環境に包まれる構成となっている。

近畿大アカデミックシアター

近畿大学東大阪キャンパス整備計画は新設の国際学部棟とアカデミックシアターの計６棟からなる大型プロジェクト。アカデミックシアター５号館（Ｓ造２階建て延べ６０３４平方㍍）は、縦横４本の帯によってつくられている。格子状を少しゆがませることで、回廊のように先が見通しにくくなり、わくわく感をあおる仕組みだ。帯の交差点に「図書空間」、図書と図書の間は「プロジェクト室（ＡＣＴ）」、帯の隙間に「自然」を配することで、どこからでも「本」「プロジェクト」「自然」に包まれる刺激的空間となっている。

畠山氏は「帯による構成と３つの空間要素が折り重なることで、偶発性と界隈性を有する都市的様相を空間化した。書籍の『知』と、ここで生成される『知』が自然発生的・同時多発的に交わる。多種多層な階層の人々や自然が時間と場所を超えてさまざまな物語を描く『洛中洛外図』のような、日本独自のプラットフォームを目指した」と解説している。

総会

末尾の数字は開催月日

答申内容を具現化

ＪＩＡ近畿

日本建築家協会近畿支部（ＪＩＡ近畿、井上久実支部長）は、大阪市の綿業会館で２０１８年度通常総会を開いた。役員改選では井上支部長を再選した。６月26日の本部総会での承認を経て正式就任する。

井上支部長は「就任から2年経った。1年目は全国大会のことでいっぱいいっぱいだったが、2年目は落ち着いてアーキサロンの開催に取り組めたほか、諮問会議から答申書もいただくことができた。この答申内容を具現化するためにもう1期支部長を務める。自分たちは建築家だということを強く意識してこれからも活動していく」とあいさつした＝写真。

議事では、17年度の事業報告と決算を審議し、承認。18年度の事業計画と予算について報告した。事業計画にはアーキサロンの開催や建築家の顕彰、情報共有のためのネットワーク強化などを盛り込んだ。

総会後は第3回アーキサロンを開いた。遠藤秀平神戸大大学院教授の講演の後「建築家と社会貢献」をテーマにグループ討議した。

懇親会では六鹿正治ＪＩＡ会長の発声で乾杯した。（5・18）